

『近代中日思想文化交渉史研究』

劉岳兵著、白春岩監訳、金津日出美*ほか訳、晃洋書房、2025年

中井 悠貴†

本書は劉岳兵氏が『近代中日思想文化交渉史研究』（江蘇人民出版社、2019年）として中国において出版、翌年に関西大学から博士号を授与された博士論文を訳出したものであり、同氏の近代中日思想文化交渉史研究の集大成でもある。構成は緒論、第1章「湘学と近代日本の知識構築」、第2章「近代日本の漢学者および湘学との関係」、第3章「日本近代思想の中国的要素」、第4章「日本近代思想と儒学」、第5章「中日近代学術思想の交流と相互作用」、第6章「日本研究学術史に対する回顧と展望」、そしてあとがきと索引よりなっている。実証的手法の徹底を期した広範な一次史料の引用と豊富な参考文献からなる上下2段組414頁にもおよぶ大著である。

まず導入部分にあたる緒論では、民国期以降の中国における中日文化交流史研究史上の本書の位置が明らかにされている。そこでは多くの日本史研究者がそれぞれの研究対象に応じた中日関係史に着目しているものの、それらを中日文化交流史として体系的に整理する通史的研究が多くは存在しないとの指摘とともに、実証性を欠いた安易な比較研究が散見される現状と課題について概観されている。そして本論の第1章「湘学と近代日本の知識構築」では、近代日本における王船山の『宋論』、魏源の『聖武記』などの翻訳・伝播とその影響、長沙の葉德輝に学んだ日本の漢学者である塩谷温・松崎鶴雄、および日本に留学した湘南籍の学者楊昌濟などについて論じている。同じく湘学と日本との関係性について取り上げた第2章「近代日本の漢学者および湘学との関係」は、京都大学の漢学者であるとともに京都シナ学の創始者である狩野直喜や内藤湖南と湘学との関係について論じたものであり、狩野と王荊生、楊樹達、皮錫瑞との関係、そして内藤による、湖南籍の学者である王船山、王闕運、葉德輝、曾国藩らに対する評価を論じている。このように中華文明の重要な構成部分である湘学に焦点を当てることで、中日文化交流における近代化をめぐる双方向的な影響を明らかにしている。

次に第3章「日本近代思想の中国的要素」では、加藤弘之の『鄰草』、夏目漱石晩年の漢詩、『論語』の近代日本における普及の一例としての西川虎次郎陸軍中將著『論語兵話』、田岡嶺雲の「和訳漢文叢書」などを例として、さまざまな角度から中国的要素がどのように日本近代思想の各分野に浸透していたのかを論じている。同じく日本近代思想における中国的要素を論じた第4章「日本近代思想と儒学」では、日本近代の「超国家主義」思想としての仏教などの伝統的要素、徳富蘇峰の晩年日記である『頑蘇夢物語』のなかの戦争責任問題、西田哲学と時局との対抗・屈服の中で現れた矛盾の現代

* 立命館大学文学部 教授

† 立命館大学大学院文学研究科博士後期課程
lt0649fe@ed.ritsumei.ac.jp

性などから、学界がこれまであまり関心を示してこなかった日本近代の思想家西晋一郎と儒学との関係を論じ、近代日本思想に対する儒学・仏教などの影響と役割を分析している。このようにして中国的要素が、一般的に西洋化と同義とされがちであった近代化する日本の思想および知識の構築に重要な役割を果たしていたことを明らかにしている。

そして第5章「中日近代学術思想の交流と相互作用」では、明治維新における近代中日学界の相互作用とそれによる相互の発展過程をどのように認識すべきか、民国時代における津田左右吉の著作とその学術思想の影響、民国時代における「日本マルクス主義」研究の著作がもたらした影響、日本において中国現代新儒教を代表する人物とされる梁漱溟の著作の影響などを具体的事例として、近代中日学術思想の交渉と相互影響の諸側面を詳細に論じている。同じく近代中日学術思想の相互利用について、その功罪とともに論じた第6章「日本研究学術史に対する回顧と展望」では、中国における日本研究関連分野の学術史を整理し、その展望を示している。具体的には、清末維新派による明治維新論とその日本研究への示唆、中国における日本思想史研究の方法論的課題を検証するとともに、中国における日本哲学思想史研究をいかに推進するか、さらには朱謙之による日本哲学思想史研究の伝統をどのように受け継ぎ、発展させていくかといった課題について論じている。これにより、清末以降の中国における日本研究の関連分野を体系的に整理するとともに、今後の発展の方向性として客観的な史料批判と研究者自身の倫理観の重要性が強調されている。

さて、以上のように近代中国と日本の思想文化の相互作用を広範に論述した画期的研究となっている本書ではあるが、遺憾ながら昨今の両国関係は台湾問題をめぐり緊迫度が増している感があることは否めない。劉氏は本書「日本語版への序文」において以下のように中国における日本研究を総覧しつつ自身の信念を披瀝^{ひれき}している。

中国における日本研究の全体像を考えると、その基本的なパラダイムは大きく「克敵制勝」と「他山の石」という二つの視点に分類できる。筆者は、研究者が原典に基づき、自然に生じる知的好奇心を尊重し、功利主義を超えた多元的な日本研究を追求することを強調している。そのような姿勢による研究こそが、日本研究の本質的価値を認識する鍵となると考える。それによって、中国自身の価値や、さらに広く世界の価値が明確になるとともに、著名な社会学者・費孝通が提唱した「美美与共」（共に美を分かち合う）という文化的理想を実現する基盤となると確信している。（iii頁）

この引用を以て本稿を^{かくひつ}摘筆する次第である。